



## 中国での雑感

6年前に初めて北京を訪れて以来、ここ数年、年に5～6回は、中国を訪問する機会が多い。現にいまもこうして中国を旅して執筆しているところであるが、他にも、上海、広州、杭州、武漢、昆明、瀋陽など、今では中国各地に知り合いも増え、筆者の研究室にも中国からの少なからずの留学生が勉学に励んでいる。他の自然科学の分野でもそうであろうが、筆者の天然物化学、合成生物学の分野では、ここ数年、中国の台頭は目覚ましいものがあり、今では質、量ともに、既に我が国を凌駕しているといっても過言ではない。潤沢な研究費をもとに、最新の研究機器を揃え、若手の台頭にも目を見張るものがある。十倍の人口ゆえの裾野の広さもあるが、トップクラスは、もはや欧米や日本に留学したところで、自国の方が遙かに恵まれた環境にあることを良く知っている。今度は我々が中国に渡って学ぶ側になるのは、もはや時間の問題である。

筆者は学生時代、モルヒネやペニシリンなど、薬用天然物に魅せられ、薬学部に進学し

て以来30余年。生物がこうした物質を生産するのは何故か？ どのようにしてあの複雑な構造を作り上げるのか？ 生物の巧妙なもののづくりの仕組みを解き明かし、さらに我々にとって都合の良いように利用、改変できれば、と研究に取り組んでいる。この分野の研究は、一昨年の大村智博士のノーベル賞受賞にも象徴されるように、日本の研究者が世界をリードしてきており、天然物からの医薬品の開発など、依然として大きな期待がある。また、このような生物模倣技術は、石油化学に依存した従来の物質生産技術よりも、クリーンかつ経済的な技術となることから、医薬品のみならず、エネルギー、新規素材の生産技術の革新にも直結する。資源小国の日本が、この中国や欧米に遅れをとることのないよう、国を挙げて取り組むべき時に来ている。

阿部郁朗  
(薬学系研究科)